

동아시아학
东亚学科
OF EAST ASIA

熊本学園大学外国語学部東アジア学科



バックナンバー

News Letter 第33号

■ 巻頭言

熊本学園大学外国語学部教授 外国語学部長 塩入

毎年大学構内の銀杏が黄金色になる頃、日本語教員養成課程の実習が国内外で行われる。コロナ禍により韓国、



本学科実習生と外国人学生の異文化交流

台湾など海外の実習は今年度も実施できなかったが、入国制限が緩和され、留学生が戻ってきた市内の専門学校で、念願の実

習が実現した。私も自分が授業をするように緊張しながら、東アジア学科3年生の実習を見学した。もちろん指導技術は未熟ではあるが、2週間余りの短い間に、学生たちは随分成長していた。特に休み時間に留学生と話し

すみ(日本語教育)

ている時の表情は普段大学で見る顔とは全く異なり、リーダーシップ、コミュニケーション能力等、外国語の教師に必要な資質を感じさせる力強いもの



東アジア学科3年生の実習風景

だった。異文化との接触はなぜ若者を短期間に変えるのだろうか。夏の銀杏の濃い緑色が美しい黄色に変わるように、異文化との出逢いには、学生たちが蓄積してきた緑を一瞬で黄色に変える不思議な力が潜んでいるのかもしれない。

□ 研究紹介——生きた言葉を「翻訳」するということ

今年10月に上梓された華語圏の小説や詩を集めたアンソロジー、『華語文学の新しい風——サイノフォン』(白水社)の翻訳に参加している。

「サイノフォン」とは世界中で創作されている華語系



文学を指す言葉で、中国の文学=中国文学という既知の枠組みやイデオロギーを越えたより柔軟で広範な文学営為が、そこには期待されている。

中国大陸はもとより台湾、マレーシアやシンガポールなどの南洋の華語圏、アメリカにおける華語文化圏などで途切れることなく中国語/非中

国語による作品が生み出され続けている。そうしたワールドワイドな華語文学のエッセンスを一冊に凝縮したの

東アジア学科准教授 小笠原 淳(中国語圏文学)

が本書である。ぜひ手に取って読んでいただきたい。

異国の小説や詩を読み、批評していくプロセスにおいて、特に日本語での論文執筆を念頭に置いたとき、翻訳という作業は不可欠だ。私にとって中国語とはもはや身体の一部であり、右手に持つ林檎を左手に手渡すような感覚で訳していく。最近、両者の障壁が限りなく狭まってきているのを感じる。言語に上下関係をつけてしまっは、うまくいかない。また、右から左に移していくときに鮮度が落ちてしまっても駄目だ。文学テキストとは時間を越えてつねに新しい状態でそこに据え置かれているから、右から左の水槽へと生きた魚を移し替えるように生き生きと訳していくことが要求される。

我田引水になるが、東アジア学科では2024年度から「中国語翻訳・通訳プログラム(仮)」を新設する計画だ。自身の経験を学生たちに伝えていく好機としたい。

□入試情報□

一般選抜・前期日程：出願期間 1月6日(金)～25日(水) / 試験日：2月7・8・9日

一般選抜・後期日程：出願期間 2月13日(月)～28日(火) / 試験日：3月7日

■ 出張日記

学会はオンライン方式で開かれ、どの大学も入場制限をかけているため、研究のための出張はほとんどない。ただ大学の業務で出張に行くことがある。11月には那覇に行った。業務上の出張の楽しみは現地の食事である。沖縄では豆腐餛飩（とうふよう）を必ず頂く。島豆腐を米麴、紅麴、泡盛によって発酵・熟成させた食品で、オリオンビールや泡盛とよく合う。味は良い。が、値段も高い。居酒屋で注文するとサイコロほどで千円札が飛ぶ。これを楊枝で少しずつそいで味わう。以前はこれをたっぷり食べるのが夢であった。数年前、中国の吉林省で学

東アジア学科教授 矢野謙一（朝鮮語学）
会の際、宿のバイキングに豆腐餛飩とおぼしきものが容器に盛られていた。係の人が紅腐乳（hóngfǔrǔ）と教えてくれた。豆腐餛飩とよく似た味だった。この地域ではさほど高価でないという。朝がゆにたっぷり入れて食べた。毎朝、寒い中国東北にいながら暑い沖縄を思い出した。11月の那覇出張でも居酒屋で豆腐餛飩を注文した。小さなお皿の上にちょこんと載せられた豆腐餛飩が出てきた。満州を思い出した。私は朝鮮半島の言語が専門だが、韓国では似た食べ物には出会えなかった。東アジアの不思議な繋がりを感じる。

□ 東アジアへのまなざし

台湾には中華民国暦という西暦とは別の紀年法がある。これは、中華民国が成立した1912年を起点としており、今年が民国111年である。中国大陸では中華人民共和国建国にともない使われなくなったので、今では台湾だけに残っている。

今年の11月11日は、民国111年11月11日という1が並ぶ特別な日となり、11時11分11秒に写真を撮ったり、SNSに記念の投稿をしたりするなど、ちょっとしたお祭りの様相を呈した。なかにはこの時刻ぴったり婚姻届を提出するカップルもいたようである。また、台鉄（台湾の国鉄）はこの日付が印字された「永康・保安間」

東アジア学科准教授 田上 智宜（台湾地域研究）
の記念切符7万枚を用意し、完売したという。永康と保安はいずれも台南市にある小さな駅だが、2つの駅名を合わせると「永保安康」（ずっと平安健康）という縁起の良い言葉ができるのだ。

まったくの余談になるが、民国元年と大正元年は同じ1912年なので、私は大正元年生まれの祖父が生きていれば何歳か即座に答えることができる。数え年になるところだけ注意すればよい。ちなみに、北朝鮮で使われている主体（チュチェ）暦も同じく1912年から始まるが、こちらは金日成の生まれた年が起点となっている。偶然の一致が面白い。

■ 新書紹介 中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』岩波新書、1966年

本書は、植物学者の中尾佐助が、作物の起源地や栽培法などからなる農耕文化基本複合を把握することで、農業を根源とする人類文化の系統化を試みた1冊である。具体的には、東南アジアの根栽農耕文化、アフリカのサバンナ農耕文化、中東の地中海農耕文化、南北アメリカの新大陸農耕文化の4つが提示される。なかでも東アジア地域に関しては、根栽農耕文化が北方に伝播して温帯の森林帯に到達することで、まず照葉樹林文化（サトイモなど）が生まれ、次にサバンナ農耕文化からイネや雑穀が、さらに地中海農耕文化からコムギやオオムギが伝わって、三層の文化複合が形成されたと述べられており、私たちに国家の枠組みをこえて深く文化を理解する重要な手がかりをあたえてくれる。また、随所

に著者の探検的調査の一端がかいま見え、読者に世界を旅したような錯覚をおこさせる。すでに出版から50年以上たつが、いまでも色あせることなく版を重ねるまさに名著である。

東アジア学科准教授 土井 浩嗣（朝鮮史）

■ 編集後記 ■

■ 各国のコロナ政策緩和を受け、本学にも留学生が戻ってきました。東アジア学科の学生たちは中国・韓国からの留学生と切磋琢磨し、語学力を伸ばそうと努力しています。今後グローバル社会が進めば、国外での就業も視野に入れて人生設計をする必要があるでしょう。われわれ教員側も日々学び、学生と共に成長していきたいと思っています(J)

発行者 熊本学園大学外国語学部東アジア学科
編集人 小笠原 淳（東アジア学科長）
〒860 - 8680 熊本市中央区大江2-5-1

